

# 大学・専門学校から公務員への軌跡

## 4章

高校や大学院を経て公務員になる人もいるが、現在の公務員の世界は、大学や専門学校を出た人がボリュームゾーンである。

現職公務員が進学先をどのように選び、なぜ公務員を目指し、いかに採用試験を突破したか。  
そこには人それぞれ、様々なドラマがあった。

取材・文／荒尾貴正（本誌編集デスク） 撮影／中野和志

日本大学  
▼  
栃木県厅

### インターんシッピでなりたい想い強まる

祖母の介護をする母親を見て育ち、自身

も中学からボランティアを始めていた青山

由佳氏は高校時代、この国の福祉政策にい

ろいろと疑問を持っていた。形にならないモ

ヤモヤした気持ちを社会科の先生にぶつけ

てみると、「だったら公務員か政治家がいい

んじゃないかな」とアドバイスされた。公務

員といえば住民票を出してくれる人、といっ

たイメージしかなかった青山氏だが、政策や

制度の大本から作ることができる仕事だと

知り、公務員を目指すことを決意する。

大学は国立大学の法学部を希望したが

かなわなかつた。日本大学に入学し、公務員

を共にする時間も楽しかったという。

一般的の授業では法律のほか、行政や経済

など、公務員試験に必要な科目はほとんど

履修した。「インターんシッピ」という教科で

「私が公務員になつたらこんなことをし

よう、こんななところを変えていこうと自然

に考えたりして、公務員になりたいという想

てサロン事業の事務所に出向き、たくさん

の発見があつたという。

たとえば視覚障害者とは全く目の見え

ない人だと思っていたが、実際はそういう人

ばかりではなく、大きな文字ならば読める

人も多いことを知つた。「それまでは単純に

「もっと街に点字を増やすべき」と思つてい

たんですが、高齢者の増加も考え合わせるなら、公共機関の文字を大きくするほうが現実的だと思いました」。

ほかにも、子育てをする母親の情報交換の場がもつと必要なこと、ほんの小さな段差が高齢者には危険なこと、さまざまな種類の障害が世の中には存在することなど、とても多くのことを学んだ。

「私が公務員になつたらこんなことをしよう、こんななところを変えていこうと自然に考えたりして、公務員になりたいという想

たとえば視覚障害者とは全く目の見えない人だと思っていたが、実際はそういう人ばかりではなく、大きな文字ならば読める人も多いことを知つた。「それまでは単純に「もっと街に点字を増やすべき」と思つてい

いがますます強りましたね」

## 大学受験の失敗など

### いくらでもやり直せる

3年次から外山ゼミに入った。外山公美教授は北米の行政管理の専門家。ゼミに入室できるのは「公務員志望者」だけで、

ゼミの目標になっている。官公庁に勤める〇Bに話を聞きに行ったり、総務省の行政相談コーナーや葛飾区役所のリサイクルキャンペーンを手伝つたりと、外山ゼミならではのバラエティに富んだ活動に青山氏も積極的に参加した。

外山ゼミのメインの活動は研究発表である。各自が1行政機関1テーマを選び、調べ

たことを発表。彼女は「厚生労働省の子育て支援対策」について発表したが、先輩含め全部で約30人分のゼミ生の研究成果を聞けたことで知識がすく増え、公務員試験の論文や面接に大いに役立ったという。

3年の5月から予備校にも通つて試験対策に万全を期し、見事、国家公務員、地方公務員などの試験に合格。大学時代はずつと厚生労働省に入ることを夢見ていたが、

「大学選びは大切ですが、たとえ受験で失敗したとしても、投げやりになる必要は全くないと思います。大切なのは、どれだけ密度の濃い4年間を過ごせるかです。結局はどこに行つても、自分次第だと思いますね」

「大学選びは大切ですが、たとえ受験で失敗したとしても、投げやりになる必要は全くないと思います。大切なのは、どれだけ密度の濃い4年間を過ごせるかです。結局はどこに行つても、自分次第だと思いますね」

「大学選びは大切ですが、たとえ受験で失敗したとしても、投げやりになる必要は全くないと思います。大切なのは、どれだけ密度の濃い4年間を過ごせるかです。結局はどこに行つても、自分次第だと思いますね」

東京法律専門学校

千葉地方検察庁

# 大学を中退して公務員受験を決断

高校を卒業し、一浪して大学に進学。第一志望で「そなかつたが、希望した大学の希望した学部に入ることができた。ところが、そ

うして始まつた玉山竜介氏の大学生活は、あまり充実したものにはならなかつた。授業に魅力を感じず、人との交流も少なく、講義が終わつたらすぐ地元に戻り、アルバイトをして家に帰る日々。次第に単位も危うくなり、将来に不安を抱くようになつた。

「親は大反対でしたが、絶対に合格する

と宣言して、何とか説得しました」

専門学校に入り、生活は一変した。毎週月曜から金曜まで、朝から夕方まで勉強に集中。この専門学校は「ゼミ学習」という授業スタイルをとつている。先生と学生が面と向

かう講義形式ではなく、学生が5、6人のグループとなり机を寄せ合つて座る。先生によるレクチャーをなるべく短くし、学生たちがにぎやかに学び合い、教え合うことに授業のほとんどの時間を割く。この方式は「すばらしかつた」と玉山氏は語る。

「みんなでワイワイしゃべりながら勉強するものがすく楽しくて、びつしり詰まつていた授業も全然苦にならなかつた」

授業を終えると、そのノリのまま仲間と遊んだ。高校を卒業したての子から大学を中退した人、元営業マン、元教師…クラスに

は様々な人がいた。昼は机を並べ、同じ「公務員合格」という目標を目指して勉学に励み、夕方からは公園でサッカーをしたり、食事に出かけた。とても刺激的で、充実した毎日だったという。

試験本番に対する備えも十分だった。たとえば、毎週行われる公務員の教養試験（学科試験）さながらの模擬試験。グループ校全体が参加しているために個人の全国順位が明らかになり、結果が教室に張り出さ

れるたびに学生が群がつた。「またこいつが1位だ」「次はトップ10に入つてやる!」とひとり

しきり盛り上がり、クラスの誰かの名前があるとみな誇らしい気持ちになつて、自然に喜び合つた。このテストが週1回繰り返されていき、そのまま本番を迎えるという流れだ。

直接対策も役立つたと玉山氏は語る。先

生との練習もあつたが、学生同士のほうがあ

多かった。面接官役、受験者役を1人ずつ

決め、それ以外の学生はぐるりと取り囲んで、やりとりを見める。人の面接場面を見ると良し悪しがよくわかる。声が小さい、早口だ、姿勢が悪い…そんな指摘が学生から飛ぶ。「人に見てもらうのは、いい練習にな

りました」。

## 高3に戻るとしたら 大学ではなく専門学校に

生まれ変わった玉山氏の新たなチャレン

ジは成功を収めた。国家公務員Ⅱ種に合格し、今は検事のサポート役として大きなやりがいと緊張感あふれる日々を過ごしている。もしもう一度高校3年に戻れるとしたら、どんな道を選ぶだろうか?

「たぶん専門学校に入っていますね。そしてまた、公務員を目指すと思います」

大原法律専門学校

参議院事務局

# 友人と先生に恵まれ超難関を突破

栗原麻衣子氏は高校を卒業し、「浪してあこがれの早稲田大学を目指した。結果は、不合格。二浪すべきか、それとも…」。

家族と相談のうえ出した結論は、「2年

こと、公務員になるのに学歴は関係ない」と、そして待遇や制度がしっかりとしている」とから、公務員を目指そうと決めたのだ。

2年後の結果を先回りして言うなら、栗

原氏は受験した公務員試験に「こと」とく合格した。第一志望だった東京都庁、さらに間専門学校に通い、公務員を目指す」とい

うものだった。「二浪し、さらに4年間大学に通つて親に負担をかけるよりは、早く働き始めようと決心しました。そのためには、短

期間で技術が身につく専門学校に行くのがいいかなと」。

栗原氏はもともと、結婚しても子どもができる一生働こうと考えていた。彼女の母親も子ども一人を育てながら働き続け、現在も勤めている。その母親が公務員である

失意の時から2年後、栗原氏が「このよう

## 自分は落ちても 仲間の合格は喜び合う

栗原麻衣子氏は高校を卒業し、「浪してあこがれの早稲田大学を目指した。結果は、不合格。二浪すべきか、それとも…」。

家族と相談のうえ出した結論は、「2年

こと、公務員になるのに学歴は関係ない」と、そして待遇や制度がしっかりとしている」とから、公務員を目指そうと決めたのだ。

2年後の結果を先回りして言うなら、栗原氏は受験した公務員試験に「こと」とく合格した。第一志望だった東京都庁、さらに間専門学校に通い、公務員を目指す」とい

うものだった。「二浪し、さらに4年間大学に通つて親に負担をかけるよりは、早く働き始めようと決心しました。そのためには、短

期間で技術が身につく専門学校に行くのがいいかなと」。

栗原氏はもともと、結婚しても子どもができる一生働こうと考えていた。彼女の母親も子ども一人を育てながら働き続け、現

在も勤めている。その母親が公務員である

失意の時から2年後、栗原氏が「このよう

な、リベンジ」を果たせた理由は「いつたい何だつたのだろうか?

彼女が専門学校で過ごした2年間は、文字通り「このような日々だった。

クラスの仲間は本当に仲が良かつた。勉強を教え合い、志望動機を見せ合い、模擬面接も交互に行って、試験が終わつた友人をつかまえては「どんなこと聞かれた?」と情報交換。試験結果が発表されるたびに、たとえ自分が不合格であつても、受かった人には「おめでとう!」と言い合える関係。相手を蹴落とす「ライバル」ではなく、みんなで一緒に頑張ろうという真の「仲間」だった。そんな雰囲気も手伝つてか、「このクラスは特に合

専門学校卒業後に学校に提出したアンケートの中で、栗原氏は後輩に向けて次の

よくなアドバイスを書いた。

「公務員試験を勝ち抜くにはもちろん勉強も大事だけど、良い人間関係が不可欠です。良い友だち・先生を見つけて、楽しく公務員試験に臨んでください」

格率が高かつたという。

担任の先生とは「親よりも長い時間一緒にいるんじゃないか」と思つほど身近に接し、良い信頼関係が築けた。試験の仕組みや面接のコツ、志望動機の書き方など、その一つひとつ

福島大学  
▼ 経済産業省

# 仲間と公務員講座が合格の決め手

「いざれどこかに就職するのであれば、世

も伝わってきた。

の中の仕組みや経済の流れは知つておいた  
ほうがいいだろう…」という考えはあった  
が、経済学部を選んだことに對して、永井  
健寛氏にはさほど強い思い入れはなかつたと  
いう。そのため大学に入つてからも、サーク  
ル活動や友だちづきあいには熱心だったも  
のの、自分の将来の方向性は見えないまま。  
周囲が就職を意識し始める2年の後半頃か  
ら、卒業後のことについて悩み始めた。

そこで頭に浮かんだのが「公務員」だっ  
た。永井氏の父親は市役所職員。仕事の話を  
聞く機会はあまりなかつたが、災害が発  
生すれば夜中でも飛び出していく父親の姿  
を見て公務員の大変さを感じるとともに、「誰かの役に立つ」という仕事のすばらしさ

にアドバイスをもらい、逆に先生からのお願い

に栗原さんも応えた。スポーツフェスティバル  
や卒業パーティの実行委員として声がかかり、役割を全うしながら存分に楽しんだ。

学校行事を楽しむだけではなく、もちろん

勉強にも励んだ。しかし、「そもそも勉強

が嫌い」という栗原氏は、授業以外はほとんど勉強しなかつた。毎日の授業で行う問題演習にしつかり付いていき、わからないところだけを自習する程度で公務員試験には

## もつと勉強しておけば という後悔

その約1年後から始まつた国家公務員試験に永井氏は合格したわけだが、最大の勝因は、仲間がいたことだという。

「私は模試で一度も合格圏内に入ったことがなく、試験直前まで不安でしかたありませんでした。一人だったら、たぶんくじけていたと思います。友人同士で励まし合い、お互い

の下宿に泊り込んで勉強を教え合つたりしたことが結果に結びついたんだと思います」

その友人たちの多くもめでたく公務員

となり、永井氏も第一志望の経済産業省に  
入省できた。

対応できたという。

「専門学校時代は、高校時代に負けず劣らず毎日、青春してました。学校生活をみんなで楽しんで、お互いに助け合つたからこそ合格できたんだと思います」

経済学部から経済産業省へと進んだため、大学で学んだ内容は今の仕事につながっていると永井氏はいう。しかし大学時代の自分の勉強ぶりを振り返つてみれば、満足よりも後悔のほうが大きい。日本経済の根幹を担う今の仕事にとてもやりがいを感じるとともに、非常に大きな責任を痛感しているためだ。

「われわれがひとつ判断を誤れば国の経済が一気に傾くような」ともあるわけですから、非常に重い仕事だなど日々感じています。それだけに、大学時代にもつともいろいろなことを勉強しておけばよかつたなうて思うんですよね」